4. 学習プログラムの開発

Ⅰ　生涯学習セミナー

Ⅱ　大学連携オープンカレッジ

Ⅲ　視察研修

Ⅰ．生涯学習セミナー

全ての学び続けたい人たちのための

生涯学習セミナー2020

第１回
「ボッチャ大会」

第２回
「横溝さやかさんのファンタジーの世界へ」

＜はじめに＞

本学習プログラムは、学校卒業後の障害青年たちの主体的な学習意欲を引き出すことをねらいに令和二年度文部科学省委託事業「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」の学習プログラムの一つとして行われた。令和元年度に行われた同セミナーに引き続き「当事者による　当事者のための　生涯学習セミナー」を目指した。

開講以来、セミナーでは①生涯学び続けること②本人の思いを軸に③育ち合える場として以上の三つの視点を大切にしてきている。セミナーのテーマは、「スポーツ・学び・文化」である。

2020 年度は、新型コロナウイルス感染症への予防に配慮しながら 2 回開催した。延べ参加人数は、126 名でその内当事者の参加は 91 名であった。

その内の 1 回は、令和二年度文部科学省「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」東海・北陸ブロック『障害者の学びの場づくりコンファレンス in AICHI』の当事者参加の場の一つとして位置づけ、開催することができた。

本セミナーは、前年度同様、当事者をメンバーに含む実行委員会を組織し、企画・運営を行っている。

＜生涯学習セミナー2020 実行委員会の構成＞

実行委員会の構成を以下に記す。

見晴台学園高等部専攻科生 2 名＋教員 1 名
見晴台学園大学校学生 2 名＋教員 1 名
るっく～あるて社員 3 名＋職員 1 名
（自立支援センターるっく　就労移行支援事業所利用者・養護学校高等部卒業生）
すすめる会理事 5 名
（本事業コーディネーター・大学校職員・大学校教員・学園教員・るっく職員）
名古屋大学　教授 1 名（連携協議会委員）
中京大学　　非常勤講師 1 名（生涯学習セミナーコーディネーター）

17 名で構成

＜実行委員会開催日と主な議題＞

本セミナーを実施するに当たり下記の実行委員会を開催した。

会場：見晴台学園　15：30～17：00　（第 2 回は「中川生涯学習センター」）
第 1 回　2020 年 7 月 22 日　自己紹介、今年度のセミナーについて
第 2 回　2020 年 9 月 18 日　実行委員のみんなで「ボッチャ」をしてみよう

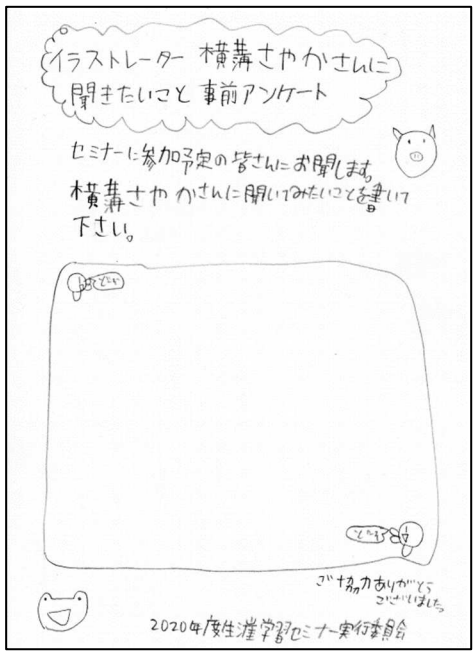
※2020 年 10 月 15 日　ボッチャ審判講習「名古屋市障害者スポーツセンター」
第 3 回　2020 年 10 月 21 日　第 1 回セミナーについて
第 4 回　2020 年 11 月 27 日　第 1 回セミナーのまとめ、第 2 回セミナーについて
第 5 回　2020 年 12 月 10 日　第 2 回セミナーについて
第 6 回　2021 年 1 月 10 日　第 2 回セミナーまとめ、今年度セミナーのまとめ
※第 6 回は、愛知県に「緊急事態宣言」が出されたため対面での実行委員会は中止とし、後日、各メンバーに「実行委員アンケート」に答えてもらうことでまとめに替えた。

＜実行委員会内の役割分担と青年たちが担った内容＞

また実行委員会では下記の役割分担を行い、当事者のメンバーには、下記の役割を担っていただいた。ここでは企画の段階から当事者が主体的に学びの場を一緒に作っていくことを目指した。

実行委員長…実行委員会の司会、当日セミナーでの挨拶
副実行委員長…ボッチャ大会選手宣誓
事務・総務係
広報・宣伝係…チラシの作成、事前アンケート用紙の作成、当日の記録（カメラ）
会場係…会場作り、ボッチャコート作成補助、名簿や名札の作成準備、当日の受付
　　トーナメント表作成
運営係…ボッチャ大会の景品準備、ボッチャ大会司会、当日セミナーでのおわりの挨拶

実行委員会の様子



事前アンケート

【資料：生涯学習セミナーチラシ】

【資料：生涯学習セミナーチラシ】

令和二年度文部科学省「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」委託事業〈三年目〉

第2回

生涯学習セミナー2020

みんなで学ぼう　講演会

講師・イラストレーター

横溝　さやか

公演日時：2021年1月9日(土)
13:00～15:00

会場：愛知みずほ短期大学

参加費無料

お問い合わせ先
見晴台学園大学校
〒454-0871　名古屋市中川区柳森町2708番地板倉ビル2Ｆ
TEL052-355-6752

※マスクの着用など、基本的な感染症対策のご協力をお願いいたします

＜生涯学習セミナーの実施内容と参加者の声＞

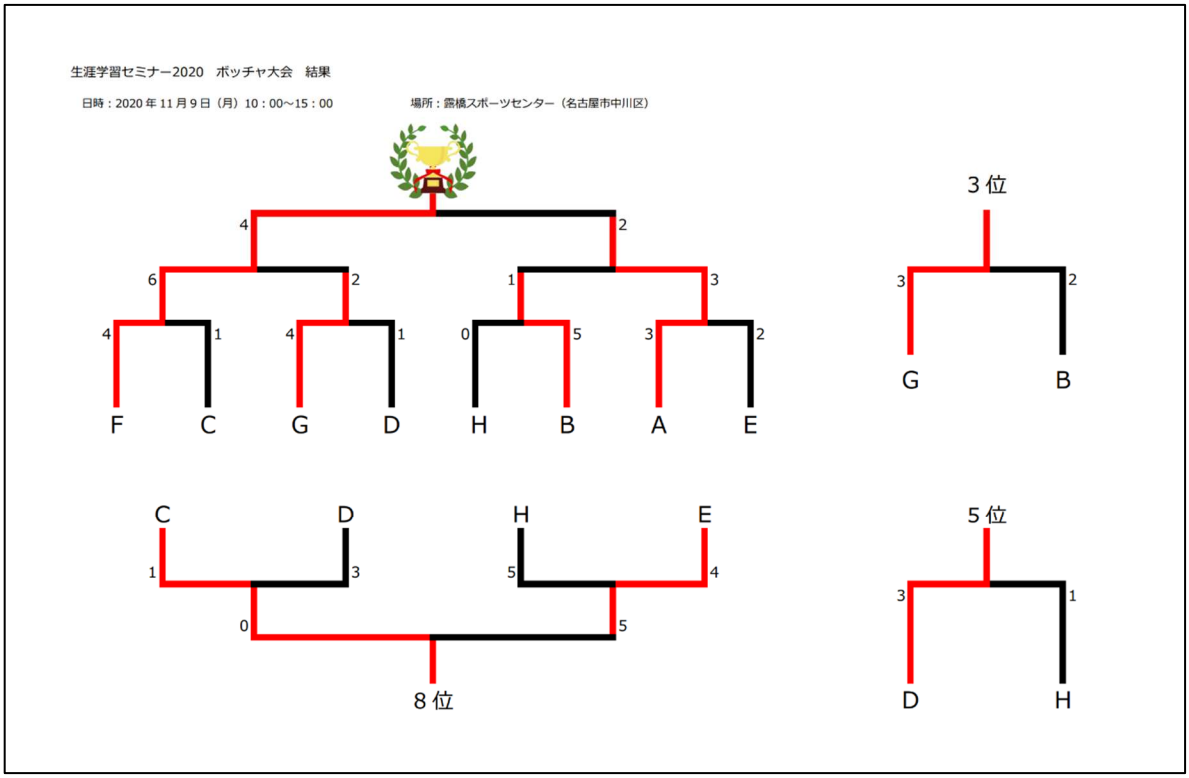
第１回「ボッチャ大会」
日時：2020 年 11 月 9 日（月）10：00～15：00
会場：露橋スポーツセンター
参加人数：79 名（8 チーム）（障害者スポーツセンター職員 2 名を含む）
（当事者 54 名、教職員 20 名、保護者 2 名、その他 3 名）
プログラム：開会式（30 分）
実行委員長挨拶
選手宣誓
障害者スポーツセンター職員よりご挨拶
障害者スポーツセンター職員によるルール説明・デモンストレーション
試合進行の説明
景品の紹介
準備体操（ラジオ体操）
練習タイム（15 分）
試合　※1 試合 3 エンド制（1 試合 25 分以内）
閉会式（30 分）
表彰式（優勝・準優勝・3 位）
障害者スポーツセンター職員からの総評
副実行委員長挨拶
記念撮影・片付け　　※アンケートについては後日行った。

＜参加者の声＞　感想＆アンケート　より（69 回答中）
◆ボッチャ大会に参加してみて
楽しかった　54　　ふつうだった 14　　おもしろくなかった　1　無回答　1

◆その理由を教えてください（一部抜粋）
「ボールを投げれて点数が決まるところが楽しかったし、ボールが軽かったので、楽に投げれていいと思いました。」（10 代・見晴台学園生徒）
「なんでとばないの。白いボールはうごくのに。とか色々思いながら、次どうなげたらいい？など考えるのが楽しかった。」（20 代・見晴台学園大学校学生）
「すごくるうるがわかりやすくて、すごく楽しかった。はじめて１ちいになって、メダルがもらえて、うれしかったです。」（40 代・生活介護事業所利用者）

◆また『ボッチャ』をしてみたいですか
またやりたい　43　　どちらでもよい　24　　もうやりたくない　3

【資料：ボッチャ大会トーナメント結果】



【資料：法人会報『木もれ陽』2020 年 11 月 20 日発行第 266 号】

木もれ陽　266号　2020年11月20日発行　（1）

木もれ陽

発　行
特定非営利活動法人
学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会
事務局：〒457 - 0037　名古屋市南区扇田町 32 - 1
自立支援センターるっく内
TEL&FAX　052（811）3776　発行人：宮原とき子
発行日：２０２０年１１月２０日
KOMOREBI 266号

ホームページ URL
見晴台学園：http://www.miharashidai.com/
見晴台学園大学：http://daigaku.miharashidai.com/
自立支援センターるっく：http://www.wa.commufa.jp/~look/

第1回　生涯学習セミナー2020

ボッチャ大会

開催しました！

11月９日、第１回生涯学習セミナーとして、ボッチャ大会を露橋スポーツセンターにて行いました。

今年度の生涯学習セミナーは新型コロナウイルスの影響により、２回のみの開催になってしまいました。実行委員が集まることも難しかった時期もあり、開催までの準備については十分な時間をとれず、実行委員の皆さんは「もっと取り組みたい」と燻っていたのではないでしょうか。

大会当日はそんな皆さんの気持ちが、十分に発散できたのでないかと思います。受付や挨拶、準備に後片付けなど、自分たちの役割を全うすることができました。

参加者も「初めてのボッチャ」という方も多い中、チームで声を掛け合ったり作戦を練ったり、応援したり、「また会えたね」と声をかけ合う人もいました。スポーツを通して、皆さんの気持ちが一つになり、自粛期間に希薄になっていた、人と人との繋がりを感じられるとても良い機会となりました。

生涯学習セミナー実行委員　斎藤智弘

第2回「横溝さやかさんのファンタジーの世界へ」
日時：2020年1月9日（土）13：00～15：00
会場：愛知みずほ短期大学　サロン室
※「緊急事態宣言」を受け、映像やZoomを使ったオンラインでの開催に変更した。
会場は、見晴台学園・見晴台学園大学校・るっく～あるて（就労移行支援事業所）の3ヶ所に分かれて行った。
講師：横溝　さやかさん
（イラストレーター／文部科学省スペシャルサポート大使）
参加人数：47名
（当事者37名、教職員7名、保護者2名、コーディネーター1名）
プログラム：リモートによる全体会（10分）
・実行委員長挨拶
・流れの説明
各会場でVTR鑑賞（30分）
・オープニング
・studio COOCA　の活動VTR
・横溝さやかさんの紙芝居公演「ピ・ヨンジュとオレ三世の人魚の国を救え」
・質問コーナー　※事前アンケートより選んで答えていただいた。
各会場でグループワーク（30分）※密を避けるため部屋を分かれて行った。
見晴台学園　2グループ
見晴台学園大学校　1グループ
自立支援センターるっく　4グループ
リモートによる全体会（25分）
・各グループからの報告
・終わりの挨拶
・アンケート記入

＜参加者の声＞　感想&アンケート　より（41回答中）
◆紙芝居公演はどうでしたか
面白かった　28　　ふつうだった　9　　少しむずかしかった　0　　無回答　4
◆その理由を教えてください（一部抜粋）
「声のお芝居が完ぺきだったし、本当にうまかったからです。」（10代・見晴台学園生徒）
「私は下手だけどアートなどの作品が好きなのでイラストレーターでスペシャルサポート大使の横溝さやかさんのオリジナル紙芝居を鑑賞してキャラ名、挿入曲、効果音も良かったですし、何よりもデザイン（キャラのほかにもいろいろな生き物がたくさん描かれており建物や背景など）とても良く興味深いストーリーで紙芝居の話し方や進め方が素晴らしかったです。」（20代・見晴台学園大学校学生）

「好きなことを仕事に出来てすばらしいと思いました。ストーリーがものすごく考えられていてすばらしかったです。声も自分で変えて、おもしろかったです。かんきょう問題が考えられていたためになりました。」（40 代・就労移行支援事業所利用者）

◆今回、生涯学習セミナーに参加してみて、自分の生活や考え方に何か変化はありましたか

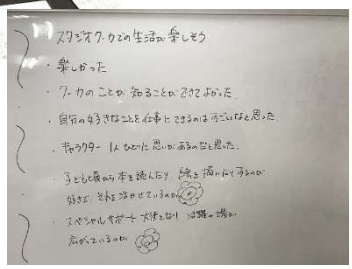
とても変化があった　16　少し変化があった　10　あまり変化はなかった　10　無回答　5

◆どのような変化がありましたか（一部抜粋）

「もっと好きなものを究めたいと思いました。」（10 代・見晴台学園生徒）

「自分ももっと努力したいと思いました。」（10 代・見晴台学園生徒）

「ゴミ問題などの環境問題が学べて良かったです。」（10 代・就労移行支援事業所利用者）



＜当事者の立場から＞

2021 年 1 月 9 日に開催された「障害者の学びの場づくりコンファレンス　in AICHI」（愛知みずほ短期大学からのオンライン配信）にて本事業について 3 年間の成果報告を行った。自立支援センターるっくでは、2 年目のセミナーについて当時実行委員として一緒に企画・運営してきた当事者のメンバー2 名と報告の準備を行った。その際、当時を振り返りな

がらの質疑の中に「現在どう思っているのか」についても発言があり、当事者の思いとしてその部分の抜粋を載せる。また今年度のセミナー実行委員長の大役を果たしてくれた就労移行支援事業所利用者の思いも掲載する。

＜私たちの思い①＞
（20 歳女性・養護学校の高等部を卒業後、就労移行支援事業所を利用し、現在、病院で清掃業務をしている）

生涯学習セミナーのような学ぶ場があったら働きながらでもまた学びたいと思いますか？
「またカローリングがあったら参加したい。食べ歩きとかまたしてみたい。つごうがあえばまた参加したい。」

＜私たちの思い②＞
（20 歳女性・養護学校の高等部を卒業後、就労移行支援事業所利用。生涯学習セミナーを通じてもっと学びたい気持ちが膨らみ現在は進学を目指している）

なぜ見晴台学園大学校への進学を希望されたのですか？
「私は、一年目の時セミナー発表会の時にもっと学びたいと思いました。就職ではなく進学の道もよいかなと思いました。そこで自分が具体的に思ったのは見晴台学園大学校です。セミナーで交流会をしていたのでそう思いました。大学に行ってもしっかり頑張りたいです。セミナーは、自分が希望した事が学べたし、皆で仲良く仲間と一緒にとても本当にステキな学びの機会でした。」

＜私たちの思い③＞
（19 歳女性・就労移行支援事業所利用者。2020 年度生涯学習セミナー実行委員長）

生涯学習セミナーの実行委員長をやってみた感想
初めて生涯学習セミナー実行委員会に参加した時は緊張をしていました。実行委員長を決めた時に私は思い切って「ハイ！」って答えました。高校の頃３年間生徒会副委員長になる為に参加しましたか無残にも３回落ちました。これを機に私は実行委員長に入ろうと思って手を上げました。私は最初戸惑いましたが、何回も会議に出るうちに緊張が解けて、慣れて来たと思います。今年度は 2 回セミナーがありました。1 回目は自分で思い切って決めたボッチャを実際に体験して大会を開催しようと決断しました。実行委員長の挨拶をして皆が盛り上がりました。実行委員長の立場としてこんな大変な時期の中でも皆が楽しんで良かったです。2 回目のセミナーは、横溝さやかさんの紙芝居を見ました。最初は愛知みずほ短期大学でセミナーをやる予定でしたが、緊急事態宣言が発令された為急遽会場３ヶ所に分かれてリモートで開催する事になりました。2 回目のセミナーは始めの挨拶をやりました。挨拶についても初めは緊張しましたが、練習をしていくうちに大きな声が少し出たと思います。コロナウイルスの中２回しか開催出来ませんでしたが、

無事セミナーがやれてよかったです。こんな時期でもありますか。皆が楽しめる企画がやれて良かったです。実際に実行委員長をやってみてみんなで３密を避けてやろうとやった結果コロナに感染する事もなくやれていい経験になりました。

＜福祉の現場から＞

本学習プログラムでは、前年度に引き続き本人の希望があれば年齢にこだわらず幅広く学習ニーズのある障害者を対象とし、取り組みを通して移行期の青年への効果や課題を抽出して明らかにすることも目指した。そのため本年度も法人内の障害者福祉事業所「自立支援センターるっく」にも参加を促した。（参加した事業所は、就労移行支援事業所、就労継続Ｂ型事業所、生活介護事業所、自立（生活）訓練事業所）などで年齢は 10 代から 70 代までの幅があった）

ここでは、福祉の現場職員の視点で今年度の生涯学習セミナーについて振り返ってもらう。

るっくコーポレーションの生活介護事業所には、10 代から 70 代の社員さん（利用者）が在籍しています。横溝さやかさんのセミナーは会場の関係で人数制限があったので参加者を呼びかけたところ、72 歳のＭさんを含め複数の参加希望者がいました。Ｍさんは今までの生涯学習セミナーには毎回参加しています。

当日は、横溝さやかさんのＶＴＲを参加者全員で視聴し、その後グループに分かれ、横溝さやかさんの紙芝居の感想をみんなで話し合う場面がありました。Ｍさんは自分の意見を言う時になり、「昔の紙芝居と違ってよかったわ」と答えたのです。普段のＭさんは事業所内の話し合いの場面で意見を求めても「まーえーわ」と答えたり、前の人の意見を聞いて「おなじ」と言うことが多いのです。そんな彼が自分の気持ちをその場で表した事にとても驚き感動しました。思い返せば横溝さやかさんへの事前アンケートの時もＭさんの変化が見られました。スラスラと記入している他の参加希望者とは反対に「何を書いていいかわからん」と頭を抱えていたＭさん。「アートワークで絵を描いている時のＭさんの気持ちはどんな気持ち？」の問いかけに、『ぼくはあまりかんがえずかきます　どうやって　おぼえましたか　ききたいです』と自分で考え記入している姿がありました。

普段のＭさんは、日中るっくコーポレーションで作業し、グループホームで生活をしている日々を送っています。自分から積極的に新しい関係を築くことや日常と違う変化は苦手です。セミナーが始まった当初は、様々な立場の人と話し合うなどＭさんには想像すらなかったでしょう。

しかしセミナーに毎回参加を重ねることで自分の興味関心以外の話を聞くことやスポーツを通し、刺激になり本人の学びに繋がったのではないでしょうか。

生涯学習セミナーとはまさに“生涯”にわたる“学び“であり、年齢は関係なくいくつになっても必要な事なのだと思います。今回のセミナーを通し職員としてＭさんの変化がとても嬉しかったです。

井上　麻衣子（自立支援センターるっく職員）

2020 年度、生涯学習セミナーは、コロナ禍ということでボッチャ大会と、横溝さやかさんの講演会の２回のみの開催となりました。各種イベントが中止になる中、セミナーの開催の有無や、方法について直前まで対応に追われました。

私は、生涯学習セミナーは単なる勉強ではなく、経験を積むという意義があると考えています。毎日の生活の中では体験できないことをセミナーとして経験すること、そこで学んだことは忘れてしまったとしても経験は必ず残ります。様々な経験を通して、人として豊かになっていくと思うのです。

一人で行う勉強もいいですが、仲間が集い、その活動の中で生まれる経験はとても貴重です。リモート会議や画面越しの交流も経験の一つですが、やはり実際に集い、何かに取り組む経験には代えられません。そのことには、生涯学習セミナー実行委員として活動する中で気づくことができました。

障害を持つ当事者は、職員に比べてやれることは限られています。セミナー実行委員もそれは同じです。実行委員の活動当初私は、どうしたらみんなが参加できる形になるだろうかと考えていました。しかし実際に活動を始めてみると、職員では思いつかないようなアイデアや、心遣いに気づく当事者の皆さんに驚きました。中には的外れな意見もありましたが、一所懸命考えをひねり出す姿を見て、自分も同じように努力できているかと自身を顧みるきっかけにもなりました。

生涯学習セミナーを続ける中で、最初は不安げだったり積極的でなかったりした参加者の方も、少しずつセミナーを楽しんで参加できるようになりました。普段とは違った顔を見せてくれたり、意外な力を発揮したり、集団活動の中で成長していく様子を感じることができました。それは実行委員の皆さんも同じです。生涯学習セミナーは障害の有無に関わらず、すべての人が成長できる場になったと思います。

私は、豊かな経験を積むことができる生涯学習セミナーは、人としての根源に迫る活動だと感じています。

斎藤智弘（自立支援センターるっく職員）

＜まとめ＞

最後に今年度、本セミナーのコーディネーターとして実行委員会にも参加し、一緒に企画・運営をすすめてきた竹井氏（中京大学非常勤講師）の「コロナ禍で生涯学習セミナーを開催する意義について考えたこと」を掲載し、今年度の「生涯学習セミナー2020」のまとめとする。

コロナ禍で生涯学習セミナーを開催する意義について考えたこと

今年度の生涯学習セミナーは、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、制限を受けながらの開催となってしまった。例年より回数を減らし、２回のみの開催であったが、今年度も実

行委員として携わらせてもらう中で、コロナ禍であっても生涯学習セミナーを開催する意義について、今年度の取り組みを振り返りながら考えてみたい。

第１回のセミナーは、ボッチャ大会であった。セミナーの中でも人気の高いテーマがスポーツであり、３年目ともなると、年に一度のお祭りのように楽しみにしてくれている参加者が多いように感じている。今年度は、パラリンピックの正式種目でもあるボッチャに挑戦した。名古屋市障害者スポーツセンターの職員の方に講師に来ていただき、ボールも国際大会で使われるものと同じものを使用させてもらった。ボッチャは、「地上のカーリング」とも呼ばれており、基準となるボール（ジャックボール）の近くにいかにボールを投げられるかを競う競技である。ボールを投げるというシンプルな競技だが、本格的に取り組むと様々な戦略が必要となったり、技術が必要になったりと深みのあるスポーツであった。手指消毒をこまめにし、ソーシャルディスタンスを保ちながらの開催であったが、参加者に感想を聞くと「普段交流できない人たちと交流することができた」、「みんなでやったから楽しいと思った」など、スポーツを通して仲間と交流できることを何より楽しんでいる姿が印象的であった。

第２回のセミナーは、様々なハンディキャップを持った人が、その人の好きなこと・得意なことで活躍する、仕事を得ることを目的に活動する福祉施設 studio COOCA に所属するイラストレーターの横溝さやかさんをゲストにお迎えし、紙芝居を鑑賞したり、お話を伺ったりして、創作活動を通した生き方について学ぶセミナーが企画された。しかし、セミナー開催直前に緊急事態宣言が発令されてしまい、当日は急遽オンラインでの開催となった。ゲストの横溝さやかさんには事前に紙芝居やお話を動画に収録してもらい、当日は参加団体ごとに分かれて、３会場を Zoom で繋ぐかたちで実施した。実行委員としては、中止ということも検討せざるを得ない状況であったが、結果的に開催することができて本当に良かったと感じている。もちろん、直接ゲストにお会いできなかったことや生で紙芝居公演を観ることができず残念だという声も聞かれたが、セミナーの開催を心待ちにしている参加者がいたり、制限された環境の中でも、様々なことを感じ取ってくれている参加者がいたりして、中止にしてしまうと得られなかった学びがそこに確かに存在していた。

このように今年度のコロナ禍における生涯学習セミナーでは、今後のセミナーのあり方を考えるうえで重要な気づきを得られたように思う。まずは、生涯学習という場においても学びの機会を確保することの大切さである。そして、セミナー参加者が最も楽しみにしているのは、人と人との関わりではないだろうかということである。今年度は、新型コロナウイルス感染拡大の中で、これまでになく様々な学びの場がなくなってしまった一年と言えるのではないだろうか。そのような中でのセミナーの開催は、難しい判断を迫られることが多かったが、学習権保障という観点から生涯学習セミナーを捉えていく必要性を改めて考えさせられるものであった。

竹井 沙織（生涯学習セミナー実行委員 中京大学非常勤講師）

Ⅱ. 大学連携オープンカレッジ

今年度の大学連携オープンカレッジは春先からの新型コロナウイルス感染拡大防止の動きにより企画そのものの成立が危ぶまれた。まず、学校休校措置と緊急事態宣言発令を受けて、連携大学のすべてが前期は遠隔授業を取り入れたことにより、支援者である学生とのコンタクトが難しくなった。次に前年度に開催し多面的な学習効果が得られたキッズワークショップだが、同様に児童館のプログラムも感染拡大防止を最優先に縮小化され、連携して子どもたちを集める企画の立案ができなくなった。そもそもコロナ禍が長期化、深刻化する状況下で障害青年や学生が集まって交流する本企画を実施して良いものかどうか判断がつかず、事業申請の段階で回数を昨年度の 4 回から 2 回に減らし、1 回目はオンライン開催にする暫定的な予定を立てざるをえなかった。

そのオンライン開催による障害青年の学びについて実際に取り組んで見えてきた課題を挙げる。第一回(10/17)は、連携大学等 4 箇所を Zoom ミーティングでつなぎ、障害青年と学生は普段利用している拠点にそれぞれ集まりオンラインでのオープンカレッジに参加した。第二回は 30 名の参加者が 90 名定員の会議室に密を避けて着席し、講師と会場が Zoom ミーティングでつながる方法で開催した。いずれの場合も個人の端末で個々にオンラインでつながる方法はとらず、いわゆるサテライト会場をつなぐイメージである。今回参加した障害青年(主に知的・発達障害)はいずれもスマートフォンなどの端末を所有しているものの、その利用形態はさまざまで学生や同世代の青年と比較して自在に使いこなしている人は少ない。例えば今回使用した Zoom アプリのようなツールを個人でインストールできない環境の人もいるため、オンラインでの学びを企画する場合そのための学習環境を保障する支援が一義的に必要となってくる。

また、障害青年の学習上の困難さは個別でありリアルタイムでの配慮・支援が欠かせない。今回は紙ひこうきづくりを教わったが、手順や折り方などを近くにいる人に確認しながら作業を進めていた。教材や課題によって必要な配慮・支援は変わってくるが、本人の主体的な学習参加をそばで見守り、支える存在は対面、オンラインに関わらず不可欠である。最後に学習の満足度の点では対面での開催で意図した同世代の青年同士として対等な関係で学び合うことへのアプローチが残念ながら一度だけのオンラインでは試みることができなかった。取り組む学習内容やオンラインの進行の工夫で障害青年と学生相互の交流を深めることや、共に学んだ充足感につながる検討が求められる。

コロナ禍で学生の様々な活動に制約がかかる中で、大学連携オープンカレッジのようなボランティア活動も例外ではない。事業終了後の本地域における継続的な活動基盤につなげる意味から連携大学間の関係提携を今年度の目標に掲げたが端緒につくこともできなかったのが悔やまれる。複数の大学による連携は本事業のコーディネーターのようなつなぐ役割が重要になるが、青年期の興味関心に寄せた学習内容や人材を大学の垣根を越えて幅広く提供することを可能にし、支援者の育成基盤を広げて展開できる点からも魅力的である。

この三年間個人的には遠くない将来に知的障害者に高等教育の門戸が開かれ、障害のある学生と健常の学生が講義やサークル活動で共に学ぶ姿のプロトタイプ的イメージで大学連携オープンカレッジを考えてきた。現実にそういう時代が来ることを切に願っている。

【資料：大学連携オープンカレッジチラシ】

令和2年度文部科学省委託事業「障害者の多様な学習活動を支援するための実践研究」
事業名：生涯の学びとしての、障害青年の「学校から社会への移行期」における継続的な学習の役割と課題

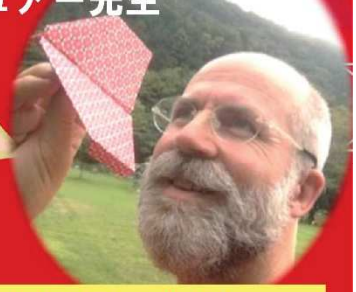
大学連携 2020 オープンカレッジ

今年度の大学連携オープンカレッジは昨年に引き続きアンドリュー・デュアー先生を講師にお招きして紙ひこうきづくりの楽しさを深めたいと思います。
コロナ禍での開催になるので第一回はオンラインで、第二回は三密にならないように配慮して対面で開催する予定です。
参加希望の方は、下記の連絡先まで電話かメールでお申し込み下さい。

参加費 無料　定員30名

お願い　新型コロナウイルスの感染拡大状況によっては開催を中止する場合があります。また、参加される方はマスク着用のうえ、検温・アルコール消毒にご協力ください。

講師：アンドリュー・デュアー先生



1961年カナダ・トロント生まれ
東海学院大学教授(図書館学)
東海第一幼稚園園長
国内外で紙ヒコーキ作家としても知られ、著作40冊以上

第1回 10月17日(土)

時間 13:00～16:00　会場 それぞれの居場所

「オンラインで紙ひこうきを楽しめるのか!?」
- 連携大学、参加者自己紹介
- デュアー先生の講義と紙ひこうき製作
- 実演
- アンケートの説明と第二回のご案内

「大学連携オープンカレッジ初のオンラインでの開催です。参加される連携大学には事前にオンライン参加の通知を送ります（別紙「大学連携OCオンライン開催について」）それぞれの居場所（大学等）に集まり、そこをオンラインで結ぶイメージです。個人の方は申込時にお近くの大学等をご案内しますので、そこにお越しください。
離れた場所で、参加者は紙ひこうきを飛ばす楽しさを共感できるのか、壮大な実証実験に挑みます」

☆用意する物：ハサミ、のり、カラーのサインペン、セロハンテープ等、アンケート用にスマホ
※ 紙ひこうきの教材は事前に郵送します

第2回 12月19日(土)

時間 13:00～16:00
会場 日本特殊陶業市民会館会議室(予定)

大学連携オープンカレッジとは・・・

高等部卒業後の障害青年と連携大学の学生が、同年代の青年として、対等の関係で学び合う新しいスタイルの学びの場です。文部科学省の委託を受け平成30年度から開催しています。

主催：NPO法人学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会
お問合せ、申し込みは NPO法人見晴台学園大学校
TEL：052-355-6752　メール：daigaku@miharashidai.com まで

【資料:第一回大学連携オープンカレッジ 10/17 の通信】

令和二年度 第 1 回大学連携オープンカレッジ　2020 年 10 月 17 日(土)リモート開催

大学連携オープンカレッジ2020 通信vol.1
2020.10.17(土) リモート開催

今年度第一回の大学連携オープンカレッジの様子をお伝えします。

委託事業三年目を迎え、当初は昨年度同様障害青年と学生ボランティアによる紙飛行機づくりをテーマとしたキッズワークショップを開催し、大学連携オープンカレッジとしての１つの実施モデルを確立させたいと考えていましたが、コロナ禍で大幅な計画修正を迫られました。事業申請段階(４月)はコロナ情勢の先行きに見当もつかず、学生が一堂に集まることを避けるためにとりあえずオンラインツールを利用したリモート開催を計画し、子どもたちを募るキッズワークショップは断念しました。テーマは変わらず紙飛行機づくりにしました。

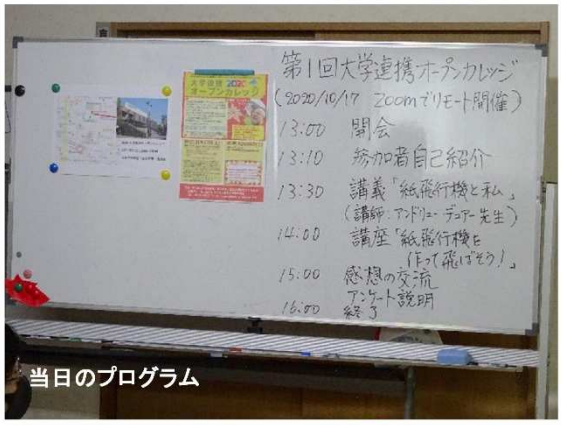
春先から大学ではオンラインによる遠隔授業が開講されているため学生ボランティアは慣れていますが、障害青年は経験が乏しく、スマホに利用制限がかかっている人はオンラインツールのアプリを自分で入れることができない、あるいはスマホを操作しながら紙飛行機を作るのも大変です。そこで、大学等所属するグループごとに少人数で集まり、それぞれの居場所をオンラインで結ぶことにしました。

連携いただいている大学によっては前・後期ともに講義がオンラインで学生が大学に集まらない配慮をしている学校もあるため、学生ボランティアへの呼びかけを広げることも困難ななか、東海学院大学、愛知みずほ短期大学、見晴台学園大学校、見晴台学園高等部専攻科の４校が参加しました。講師は昨年度に続き東海学院大学教授で紙飛行機作家のアンドリュー・デュアーさんです。

当日は zoom を使用してつながった環境で、コーディネーターの田中先生あいさつ、自己紹介を兼ねて順番に学校紹介をしたあと、デュアー先生の講義と紙飛行機の制作です。この日は折り紙ヒコーキと「マーリン」という名前のホチキスヒコーキを作りました。デュアー先生の説明をオンラインで視聴している時は「ふむふむ」とわかった気になっても、目の前の紙に向かうと「どっちに折ればいいの？」と戸惑ってしまい、またオンラインで教え合うといった具合に制作は進んでいきました。できた人から飛ばし始めた歓声と姿をこれまた映像で横目に確認しながら、自分のヒコーキを飛ばすのに夢中になる、という具合に遠く離れた場所で同じ作業をする相手を微妙に意識しながら予定した時間があっという間に過ぎていきました。

初めての試みでしたが、今回は自分の周りにはリアルな仲間がいて、そうした小集団同士がオンラインでつながるという方法だったこともあり、コミュニケーションに不安のある人も殊更緊張せずに参加できたのは良かったと思います。一方でオンラインゆえにオープンカレッジ参加者間の交流の意識がどのくらい持てたのだろうかという課題もありました。次回は広い会議室で密を避けて開催する予定です。(担当 藪)

【資料：第一回大学連携オープンカレッジ 10/17 の通信】

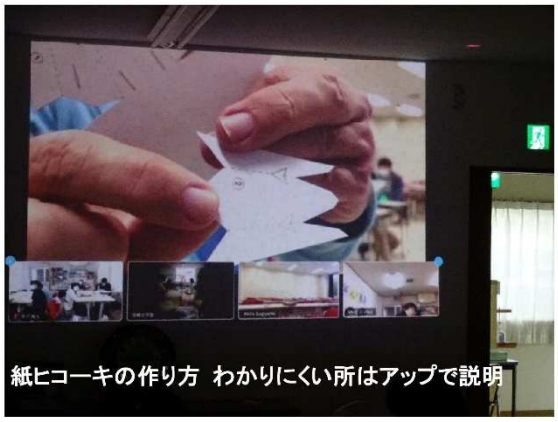


当日のプログラム

見晴台学園に集まった学生・青年たち

zoom でつながった学生・青年たち

デュアー先生の講義をzoomで視聴


紙ヒコーキの作り方 わかりにくい所はアップで説明

それぞれの場所で飛ばす様子もzoomで共有

参加者記念撮影

【資料:第一回大学連携オープンカレッジ 10/17 の通信】

最後に「オンライン開催による学生相互の交流」の視点から今回の大学連携オープンカレッジについて、当日オンライン配信や学生・障害青年をサポートしていただいた連携大学等のスタッフ、先生方に感想を含めご意見を寄せていただきました。今後の企画・運営に反映させていきたいと思います。

・通常のオンライン授業は個別にログインするために個人の顔や氏名が画面に表示されるが、集団対集団であったため、想定外の困難さが発生した。
・講演場面
講義の途中で、講師から各会場への数問の質問を準備するといった会場間の交流が促進されるような展開・仕掛けが必要であった。
（例）講義の中で、課題や問題が出され、各会場ごとに相談して、解答をフリップに記入し、代表者がフリップを見せながら答える。「〇〇会場の〇〇です。」「答えは〇〇だと考えました」
・自己紹介場面
一人ひとりアップにしてフリップに書いた名前を見せながら話す。
・紙飛行機を飛ばす場面
（なかなか揃えるのは難しいのを前提に）すべての会場が同じ掛け声で一緒に投げるような一体感が感じられるような場面を設定する。
・事前に想定した以上に作り方が難しく伝わりづらかった（もしかしたら、どのような飛行機を作るにしても）ため、全体の構成のバランスを講義＜自己紹介にしてもよかったかもしれない。

・テーマが昨年に引き続き「紙飛行機」だったので、継続参加者にとってはわかりやすいテーマだった。また初参加の人にも説明しやすかった。
・ワークショップ（モノづくり）型の取り組みは参加しやすかった。
・リモートであったが、一緒に同じことを行うという一体感があった。
・画面を通して即座に作り方などを理解するのは難しかった。作り方などの事前配布があればよかった。
・１２月の際、紙飛行機を飛ばすという企画はあると思いますが、うまく飛ばせない人もいるので、飛行機のデザインコンテストなどがあると、より交流しやすいと思った。
（もし１２月もリモートになった場合でも企画しやすい）
・その他…今回はリモートでの交流でしたが、昨年参加していた学生さんについては、「あっ、去年も参加されていた学生さんだ」と覚えており、回数を重ねることで、少しずつ顔なじみになっていくのだと思いました。前段にも書きましたが、「モノづくり」というテーマは交流しやすいものだと思いました。

【資料：第一回大学連携オープンカレッジ 10/14 の通信】

・関わっている障害青年たちは様々な特性から不安感や苦手意識が強く、以前経験したオンラインでの交流では戸惑う姿が見られたので心配もあったが、zoom でつながる他大学の様子が画面に映し出されると「わー！」と歓声が上がり、手を振ってみたり、まるで同じ空間で話を聞いているかのように発表に対して大きな拍手を送ったりと、心配をよそに楽しく、そして真剣に参加する姿が見られ、離れた場所にいても同じ話や気持ちを共有することができるオンライン開催の可能性を感じた。
・オンライン開催の場合に学生が担うべき役割にはどんなものがあるのか、どんなことならできるのか、事前に検討し役割を持って参加してはどうか。
・今回の実践をたたき台にしてオンラインと対面双方のよさを検討し、うまく掛け合わせることができれば、より広く、大勢の方に本事業のことを知ってもらうこと、参加してもらうことにつながると思う。

・全体的に興味深いセッションになったと思いました。参加者の多くは昨年も参加していましたので、交流もヒコーキづくりもゼロからのスタートではなかったです。
技術面の課題はありましたが、それが逆に雰囲気を和ませることになり、参加者は一生懸命に見るきっかけともなりました。しかし、ほかの反省でも書かれたように、部屋同士、そしてほかの会場の個人との交流は難しかったようです。モノづくりをしながら多くの人とコミュニケーションをとることが昨年の利点でしたが、今回は同じ部屋の人との交流だけに限られました。そのために、相談できる人は少なかったかもしれません。各部屋の出来上がりには特徴があったように思えました。
指導の工夫と成果は画面の切り替えなどと関係していましたので、改善の用地はありますが、その日の環境という条件の中では、一応満足に指導できたかなと思います。確かに、作り方のプリントがあればよかったです。

【資料:第二回大学連携オープンカレッジ 12/19 の通信】

令和二年度 第 2 回大学連携オープンカレッジ　2020 年 12 月 19 日(土)

大学連携オープンカレッジ 2020 通信 vol.2

2020.12.19(土) 日本特殊陶業市民会館第一会議室

今年度第二回の大学連携オープンカレッジの様子をお伝えします。

前回はオンラインツールを利用したリモート開催でしたが、企画の段階で二回目は対面で開催することを前提に計画をたてていました。冬になり、再び新型コロナウイルスの感染拡大が予測されたので会場は 90 人定員の広い会議室を借り、換気と密にならないような座席の配置を考え準備を進めました。今回は障害青年 12 名と東海学院大学、愛知みずほ短期大学、愛知県立大学の学生が 12 名、連携協議委員・スタッフ 6 名が会場に集まることができましたが、講師のデュアー先生が感染予防のためにリモートでの参加となりました。

参加者は障害青年が準備したくじを引き、5 つのグループに分かれて講座を始めました。対面での開催は今年初めてなのでコーデネーターの田中先生より大学連携オープンカレッジの趣旨を説明していただき、前回リモートで作った「マーリン」紙飛行機を飛ばしながらグループのメンバー相互の交流を進めました。続いて新作の紙飛行機づくりに挑戦ということで、デュアー先生に準備していただいた「クリスマスツリー」の作り方をモニター越しに教えていただきました。参加者の様子を見ていると定型的な飛行機と違ってもみの木の形に切り抜くとクリスマスツリーのイメージが浮かんでくるのでしょう。それぞれカラフルな色使いでゴージャスな釣りをデザインしていきます。初めて顔を合わせたこともあり最初は会話も少なかったのですが、お互いにデザインを見せ合ったり、組み立て方がわからない青年に学生ボランティアが手を貸すなど徐々に雰囲気が打ち解けていきました。

完成した人から会議室中央のスペースでモニターのデュアー先生に向けて紙飛行機を飛ばしました。うまく飛ばない時はカメラに近づき、紙飛行機を見せてアドバイスを求めるとデュアー先生がモニター越しに翼の傾きやバランスを取ってみたら、など的確なコメントを返してくれます。つい半年前には経験したこともなかったリモートでのやりとりがごく自然に行われている様子には複雑な思いもありますが、青年たちが何の違和感もなくモニター越しのデュアー先生を受け入れ、教えてもらう姿を見ると順応性の高さに感心します。

最後はグループごとにアンケートで出た感想を代表者が発表し、二回目のオープンカレッジは無事に終了しました。

【資料：第二回大学連携オープンカレッジ 12/19 の通信】

【当日の様子から】

連携協議委員の杉山先生がリモートの準備をして下さり講師のデュアー先生と会場がつながりました。

前回作った「マーリン」紙飛行機を一緒に飛ばしました。右は今回作る「クリスマスツリー」です。

形が単純で切り取ることは難しくありませんが、重りのパーツを先端に重ねる所がわかりにくいので
教え合ったり、助けてもらいながら作りました。

前年度の対面での講座よりも積極的にデュアー先生に質問をする青年が見られました。リモートの効果
(話しかけやすい)もあったようです。最後はグループ代表が順番に感想を述べましたが、今後は直接・間接の
コミュニケーションを自在に取り入れた学び方がスタンダードになっていくのでしょうか。